

第七章 〈関係性〉の人間学

(1) 「人間的〈関係性〉」という視点について

さて、ここからわれわれは「〈関係性〉の分析」というアプローチについて詳しく見ていくことにしよう。「〈関係性〉の分析」とは、前述のように、人間存在の本質を、その存在が多彩に織りなす「〈関係性〉の構造」から理解するための方法論である。とはいえ、そもそも“関係性”とは何なのだろうか。

まず“関係性”とは、関係の性質、いわば関係のあり方のことを指している。“関係”とは、もともと「(何か)を結び付けている繋がりや関わり」のことであり、人間と人間の関係のみならず、「あるものが他のものに影響を及ぼす」という意味をも含んだ概念である⁽¹⁾。したがって存在論的な意味での〈関係性〉とは、何らかの存在が、別の存在と結びつくときのあり方のことであり、同時に存在と存在の結びつきにおいて現れてくる、何らかの影響や作用のあり方のことだということになるだろう。とりわけ本書では、人間という存在にとっての〈関係性〉、すなわち「人間的〈関係性〉」を問題としている。そのためわれわれの関心となるのは、人間存在が何ものかとの間に特定の〈関係性〉を取り結ぶとき、そこにはいかなる意味が生じ、いかなる原理が出現するのか、ということになるだろう。

人間存在が形作る〈関係性〉をめぐるっては、これまで社会学や哲学において多彩な研究が行われてきた。例えば社会学では、伝統的に人間の“行為”——とりわけ社会的な意味を内在した社会的行為 (social action) ——に着目し、そこに含まれる根源的な原理を読み解いていくとともに、そうした行為者の集合

体として、いかにして社会という複合体が成立しているのかということに関心が払われてきた⁽²⁾。実際、T・パーソンズ (T. Parsons) からN・ルーマン (N. Luhmann) に至る「社会システム理論」(social systems theory)、G・H・ミード (G. H. Mead) からH・G・ブルーマー (H. G. Blumer) に至る「シンボリック相互作用論」(symbolic interactionism)、A・シュッツ (A. Schütz) の「現象学的社会学」(Phänomenologische Soziologie) など、多くの理論に共通するのは、価値規範や社会的役割をも含んだ意味の世界を背景に、「個人と個人」の相互作用、そして「個人と集団」の相互作用というもの、統一した原理のもと、いかなる形で説明することができるのかという問題意識であったと言えるだろう⁽³⁾。

これに対して哲学の場合は、〈関係性〉をめぐって、より存在論的な問題について関心が払われてきた。とりわけ重要なのは、自己と他者をめぐる根源的な原理に関わる“他者論”であろう。もちろん現象学的な意味での最初の他者論は、E・フッサール (E. Husserl) の「間主観性」(Intersubjektivität) 概念が示すように、もともとデカルト的な“自我”から出発しても、“他者”という存在の根拠を基礎づけられないという問題を克服することにあつた⁽⁴⁾。しかしここでは、例えばJ・P・サルトル (J.-P. Sartre) の「相剋」(conflit) 概念や、E・レヴィナス (E. Lévinas) の「応答責任」(responsabilité) の概念が示すように、われわれが自明視している“自己”という存在が、“他者”という存在なしには成立しえないという重要な指摘がなされてきた⁽⁵⁾。また、より実践的な問題意識としては、例えばH・アレント (H. Arendt) の「現れの空間」(space of appearance) が、自己の「唯一性」(uniqueness) と人間の「複数性」(plurality) を強調したものであつたように、そこではいかにして全体主義へと陥ることなく、人間が他者の「差異性」や「異質性」を前提とした多元的な共生を実現できるのか、という議論の方向性も含まれていたと言えるだろう⁽⁶⁾。

本書が明らかにすべき「人間的〈関係性〉」が存在論に基盤を置く以上、われわれもまた、他者論から出発しなければならない。ただしここでの議論が「個性か／全体性か」、「差異性か／同一性か」といった枠組みを強調するだけで終わるのであれば、われわれは結局、あの「かけがえのないこの私」を称揚する〈自立した個人〉の思想から抜け出すことはできないだろう。また、ここで展開

される理論的枠組みは、これまで行ってきた「環境哲学」や「〈生〉の分析」のアプローチと連結できるものにならなくてはならない。したがって本書では、そうした成果も取り入れながら、本書なりの他者論を展開しつつ、「人間的〈関係性〉」を読み解く理論的枠組みを独自の形で再構築していくことにしたい。

(2) 「人間的〈関係性〉」の基本構造としての「〈我－汝〉の構造」

理論的枠組みを構想していくにあたり、最初に問わなければならないのは、まず「自己」とは何か、「他者」とは何かという問題である。その最も端的な説明は、「自己」とは「私」という存在のことを指しており、「他者」とは「私」ではない（他の）存在のことを指しているというものだろう。つまりわれわれは、「私」という形で特定可能な何ものかのことを“自己”と呼び、そうした自己とは区別される何ものかのことを“他者”と呼んでいるのである。

一般的に“他者”と言う場合、われわれは友人や同僚など、日々接触する「現存する顔見知りの人間」のことを連想するかもしれない。実際こうした他者は、日常生活実践においてきわめて重要な位置を占めている——本書ではそれを「中核的他者」と呼び、あらかじめ区別しておくことにしよう——。だが先の定義によるならば、人間存在にとっての他者とは、それ以外のものをも含んでいる。例えば自身は認知しているが、実際には接触することが難しい「現存すると仮定できる人間」、曾祖父母から1000年前の名もなき兵士に至るまでの「過去に生きた人間」、それとは反対に、数世紀先の世代をも含んだ「未来に生きるだろう人間」、それどころか物語の主人公といった「空想上の人物」、古来より信仰の対象となってきた「神」、生活をともにしてきた「人間以外の生物」、そして浜辺で拾った小石のような「無生物」でさえ、ときに他者として現前しうるからである。

特定の存在が“他者”として現前するのは、それが“自己”に対して意味を持って区別されたときである。そして“意味がある”ということは、そこに何らかの〈関係性〉が成立しているということに他ならない。つまり「現存する顔見知りの人間」にはじまり、浜辺の小石のような「無生物」に至るまで、あ